

長靴をはいた猫

ある田舎の粉挽き職人が死んだ。長男には粉挽き小屋、次男にはロバ、ダウン症の三男には猫が遺産として分配された。

「俺は、粉挽き小屋で商売ができる」

「俺は、ロバを使って宅配をするさ」

「僕は、猫といると楽しいんだ」

三男だけが生活の糧にならない猫を相続し、お兄さんたちは心配しました。

ところが、この猫が切れ者。長靴をはいて、颯爽と狩りに出ます。そして、ウサギや魚など何でも獲ってきてくれました。

「君は、凄い取柄があるんだね」

「あれ、ご主人様にもありますよ、取柄」

「何だい？」

「お教えしますよ」

猫が、そう言って、数日後。王様が王女と共に、この田舎町を訪れることになりました。名もない田舎者の三男は、王様の馬車を一目見ようと、道に佇み、待っていました。そして、馬車がやってきました。その時です、三男の猫が道に飛び出したのです。三男は、後先顧みず、馬車の前に飛び込み、猫を助けました。しかし、大怪我をしてしまったのです。馬車から、王女が出てきて、手当てをしてくれます。

「この方は？」

「この地方の大地主です」

「そうです、大地主です」

村人は、みんな嘘をつきました。一人残らず、三男は大地主だと言ったのです。王様も心配して言います。

「近くに侯爵の城がある」

「そこまで、馬車に乗って参りましょう」

そうして、大怪我をした三男を馬車に乗せ、王様と王女は、侯爵の城に向かいます。

そして、侯爵の城に着き、手当てを済ますと、王様は侯爵に問います。

「この方は、どなたじゃ？」

「大地主です」

なんと、侯爵までもが嘘をついたのです。

「猫を助けるために馬車に飛び込むなんて……」

王女は、泣きながらも、三男を気遣い、いつしか恋が芽生えました。

そして、結婚。

三男は事情がよく分からなかったのですが、一言。

「猫は無事ですか？」

「もちろん、新しい家族になってくれました」

猫は、三男の家族として、愛されました。

幸せ真っ盛りの中、王様が猫に問います。

「何故、村人たちは、彼が大地主だと言ったんだい？」

「王様、ご存知でしたか」

「ワシがそんなことも見抜けないとでも？」

「お兄さんたちが頭を下げて根回ししたんです」

「侯爵までも嘘をついたのかい？」

「あれは、想定外でした」

「最後に一つ。もしも彼が馬車に引かれて死んでいたらどうする気だったんだ？」

「・・・それまでの人生かと」

「ふおっふおっふおっ、お主、面白いな」

「これが彼の人徳という取柄です」

了